

行動援護に望むこと

I LOVE Family! ～障害は誰の所為でもない～

我が家の長男は知的障害と自閉症を持つ 16 歳の青年です。彼は外出するのが大好きです。幼少期に比べるとずいぶんと落ち着きましたが、家の中でも外出先でもいろいろなことがあります。行動関連 12 項目について、私が甘めに採点してみると 13 点になります。多動、奇声、突然走っていなくなることはしばしば。悪い環境が重なったり、自分の思いと違う状況に遭遇すると、パニック、物を投げる等の行動もあります。立派な行動援護の対象者です。そして、これまでほとんどの場面で、親が行動を見守ってきました。

幼少期はショッピングセンター等に行くと、あっという間に走っていなくなってしまうことが日常茶飯事で、見つかるまでの間、何か良からぬことが起こっていないかとても心配しました。私も悪い行動を減らしたい、危険が起こらないようにしたいという気持ちが強く、くどくどと言葉かけをしたり、手を引っ張ったりしていました。当時の状況から考えるとやむを得ないことだったとは思いますが、まさに「悪い」ことを減らすための援護でした。

行動関連項目の中には、「言葉以外のコミュニケーション手段を用いた説明の理解」、「本人独自の表現方法を用いた意思表示」という項目があります。彼はいずれにも該当しますが、この二つのことは決して悪いことではなく、彼にとってもとても大きな救いとなっています。彼は親のみに通じる独特の単語・身振りや、絵・写真カード、身近な IT 器械（パソコンやニンテンドーDS など）を使って簡単な言葉のやりとりをすることができます。本人とのコミュニケーションが親からの説明のみでは、結局は命令になりがちです。他人から見るとおかしい方法かもしれませんが、本人にわかるように伝えるのみならず、本人からわかるように伝えてもらうことができることにより、やりとりの幅が広がり、何より本人の満足感が大きくなります。これらは、「良い」ことを増やすための援護と言えます。

現在、彼は毎日のように両親、時として支援者やボランティアと町中に出かけています。時間に余裕があるときは、彼が自分で自分が行きたい場所や店を決めます。条件が整っていれば、一人で出かけることもあります。そして、お菓子やジュースを自分で選んで買っ

で喜んでいます。このようなことを自分で選択し、要求できるようになった、そのための経験を沢山積んできたことが、彼の財産になっています。そして、本人の意志がはっきりと伝わり、それが尊重されているときには、周囲が困るような行動はとてまもなくなくなりました。

今でも、彼は買い物に行ったときに親と離れて一人でふらふらとしています。店の中で一ヶ所にずっと立って低い声でうなりながら身体を揺すっていたりして、他の人から見てかなり変な人です。でも、それ以上の迷惑はかけずに過ごしています。自由な行動にはどうしても危険性が含まれます。親や周囲の人はいろいろな点で優先順位を考える必要があります。安全性を優先するのか、本人の希望を優先するのか。絶対に守らなければならないことはなにか。許容出来る範囲はどこまでか。見栄えが悪いとか、少しの迷惑、少しの危険は許容できるのか。それらのことについて、あらかじめ本人や親などの家族と支援者、時として周囲の人との相談や合意が必要でしょう。本人の希望する外出はできるだけ実現してあげたい。そして、自由に楽しんで欲しいと思います。そしてこのことは親がいなくなってもずっと実現し続けて欲しい。自閉症や知的障害を持つ人にとって、必ずしも容易なことではありませんが、「行動援護」がその願いを担う役割を果たしてくれるのではないかと期待しています。

大屋 滋（総合病院 国保旭中央病院／千葉県自閉症協会）

注

本稿は、2007年に作成された行動援護従業者養成研修テキスト付属の教材として作成された同タイトルDVDのテロップを書き起こしたものです。映像および原稿の使用については提供者である大屋氏に許可を得ています。